貞山運河 荒浜小校歌 ダンプカー

震災の記憶 刺しゅうに

仙台のNPOが講座

38人つないで残す

東日本大震災前後の被災地の風景を、布と糸で自由に表現する「フリー刺しゅう」で残そうと、仙台市の女性たち38人が作品作りに取り組んでいる。各自が25チン四方の布に刺しゅうし、つなぎ合わせて1枚の大きなタペストリーに仕上げる予定だ。

NPO法人イコールネット仙台が主催する3回続きの講座「ししゅうで伝える『わたしの物語』―東日本大震災の記憶」の一環。フリー刺しゅう画家として活動する昭和女子大名誉教授天野寛子さん(78)=東京都=が指導している。

天野さんは震災や東京電力福島第1原発事故をテーマにした作品を制作してきた。2013~15年、津波で消滅した陸前高田市の高田松原の松林を「針仕事で作ろう」と呼び掛け、市内外から集めた74枚の刺しゅう作品をつなぐプロジェクトも手掛けた。

10月31日に仙台市若林区のせんだい3・11メモリアル交流館であった講座の初回では、参加者が持参した写真や絵を基に「被災前の貞山運河」「荒浜小校歌のレリーフ」「復興工事のダンプカー」などを布に描き写した。

天野さんは「上手下手を他人と比べることなく、一人一人が風景と物語を布に再構築することが大切だ」とアドバイスした。

宮城野区の会社員遠藤たか子さん(61)は蒲生地区の自宅にかつてあったクリの木の絵を持参した。「『孫に拾わせたい』と義父が植えた思い出の木だったが、津波でなくなった。クリの絵を描くと癒やされるので刺しゅうしようと思う」と話した。

仕上がったタペストリーは来年、メモリアル交流館に展示する。イコールネット仙台の宗片恵美子代表理事は「刺しゅうは私たちの経験を伝え、女性の学びや備えにつなげる一つの手法だ」と話す。

天野さん(左から2人目)のアドバイスを受けながら布を選ぶ参加者